岡山畜産便り 1961.10

秋の鶏の管理

川　崎　　晃

暑苦しい夏が過ぎ、秋冷をおぼえる気候となると鳥も元気づいて食慾を増してきます。

しかし今年の夏を振り返ってみると、一般に温度が高く平均温度は過去10年の内で最高であり、最低気温が割に高く夜間まで涼しくならず、又湿度も平年に比べて高く、従って不快指数は最高 85 を示し、夜も75を下っておらず不快を感じ通しであったと云う気象状態でありました。更に９月に入っても残暑が酷しく且つ長く続き、10月初めにかけて平年より６、７度高い８月下旬の気温が続いた状態でした。従って暑さに弱い鶏に与えた影響は非常に大きく、故障を起す鶏が多く出たようであり、他方、病気ではロイコチトゾーン病の発生が相当ありその害も大きかったようであります。その後 10 月 10 日前後より急に温度が下り、この気温の激変は弱っている鶏に更に悪い影響を与えているようであります。

このような状況ですから今年の鶏の秋の管理は平均以上に特に気をつけてやる必要があります。

一般に秋は良い時季のようでありますがいわゆる時候の変り目であり、温度は日を追って下がって行き、日照時間はどんどん短くなる時期で、丁度春の反対現象を呈し、養鶏においては変化の多い多難の時であります。そして一方卵の価格は最高の時期ですから、細心の注意を持って計画的に周到な飼養管理を行ない、良い産卵を続けるようにすることが養鶏経営上非常に大切なことであります。

次に管理、衛生の面について重点的に述べます。

１、管　　理

防暑の為に使用したものは早く取除き、鶏舎周囲の日蔭樹は適当に枝打ちして鶏舎内外の採光、通風をよくしまた乾燥につとめます。晴天で日中の最高温度がわりに高い日は夜の冷え込みが大きく、いわゆる日較差が大きく15度前後になり鶏にとって悪い影響を与えますから、日中はできるだけ開放的にし、夜は冷え込みの状況を天気予報その他により予め察知し、適切に窓及び周囲の防風・防寒処置を行なうようにします。これが適時適切に行なわれないと、ループ・ジフテリー症が発生し易く、若雌は部分換羽に移り、産卵は低下し、２，３年鶏は点灯していても中に換羽にかかるものがでて、その影響は大きくなります。

防風・防寒でありますが、晩秋から初冬にかけては急に寒さが襲ってくることがありますから特にケージ管理においては早めに防風・防寒設備を整えておき、防寒処置が間に合わなくて鶏をいためるようなことがないようにします。

点灯管理

秋は、前に述べましたように日照時間がどんどん短くなる時期でありますが鶏の産卵は日照時間と非常に関係があり、産卵を順調にさせるためには日照時間の短縮を点灯により人工的な光で補うことが必要であります。この点灯は鶏の年令、採卵鶏、種鶏によって、それぞれ適切にやらねばなりませんが、一般的には、早朝点灯、夕方点灯、これの組み合せで（２，３年鶏の最後の点灯は終夜点灯）日照時間と点灯時間を合わせて１日の明るい時間が13－14時間になるようにします。電球の明るさは手飼の場合は16.5平方米（５坪）バタリー、ケージの場合は3.6米（２間）当り40ワットの電球１ヶをとりつけ、直射光線が鶏の頭部に当たるようにすることが必要です。

光源は一般的には普通電灯を使用すればよろしい。若し蛍光灯を使用する場合は次のことに留意します。

㋑真天然白色の蛍光灯が鶏に最も強く感ずる 650 ミリミュー附近の波長の光線を多く放出するからこれを使用するがよろしい。

㋺普通の蛍光灯は低温（摂氏５度以下）では起効が困難になりがちであるから特に早朝点灯においては低温用蛍光灯を使用するがよろしい。

㋩温度が下がった場合に光束低下を防ぐために、反射笠の下面からガラス板で封ずる。

なお点灯管理においてはタイムスイッチ等を使用して規則的に行なうことは非常に大切なことであります。

岡山畜産便り 1961.10

郡飼ケージ管理

収容羽数が多いと産卵率、受精率等に影響しますから、白レグでは雌を 14 乃至 15 羽、できれば 12 羽、兼用種では 10 羽程度にするのがよろしい。収容時期はなるべく早いがよく、雌は少なくとも産卵１ヵ月前に収容し、雄は種卵をとる時期が近づいて急に配雄しないように、できるだけ早く配雄し馴らしておく必要があります。又、夜隣同志の２室の鶏が境に集まって密集する為にループ等の病気の発生を見ることがありますが、この場合は境界の金網を２重にして 10cm 位の間隔を設けるとよろしい。

群飼ケージにトラップネストを設けた場合に若雌は中々ネストに入らぬことがありますが、これはネストが明る過ぎる場合にこのようなことがあるので、適度に覆ってすこし中を暗めにしてやるとよろしい。

若雌の管理

春に孵化した若雌は既に産卵し、又は産卵を始めようとして居りますが、平飼、群飼ケージの場合はゆっくりと収容し、決して密飼にならぬようにし十分運動さすことが必要です。発育に差がある場合は、発育の不完全なもの病気のものなど見込のないものは思いきって淘汰し、その他は発育の程度に応じて処分し、体ができずに発情が進みすぎているものが運動、飼料により抑制し、遅れているものは促進するようにして、白レグで大体 160 日前後、体重１K 500 程度で、１代雑種は 170 日より 190 日で１K800 ～２kg で初産をさせるようにします。ケージ管理に移す場合は日令的には初産前１ヵ月位に移動し、時期的には寒さがはげしくならぬうちになるべく早く移して、ケージ管理に馴らすことが必要です。寒くなって移すと往々にして休産、部分換羽に移ることがあります。もしケージへの移動が遅れて休産、部分換羽に移るようであれば、早く適当な防寒処置をすると同時に13時間程度の軽い点灯を行なうと効果があります。その他の若雌でも産卵率が 60%以下に下る傾向が見られた場合は、軽い点灯を行なって産卵を回復させ鶏の状態を正常にもどすことが大切です。

２、３年鶏は既に点灯管理に入っておると思いますが、点灯中においても採算ベースにのっていない鶏はどしどし淘汰し、常に経済的に眺め乍ら管理することが必要であります。

２、衛　　生

秋に発生し易い主な病気は次のとおりであります。

(A) ジフテリー症

これは軽いものはループと一般に呼ばれており、重いものでジフテリー炎症を起しているものをジフテリー症といっています。斃死率は余り高くないのですが、その被害は案外大きく、育成中のものに発生した時は発育に非常に影響し、成鶏に発生した時は産卵に及ぼす影響は非常に大きいのであります。鶏は群として管理しますから（群飼バタリー、ケージにおいても飲水は群となる）一部の鶏がジフテリー症にかかると非常に早くまんえんします。従って、発生を早く発見し、早く病鶏の隔離、治療を行なう必要があります。早期発見の着眼点としては、食愁の状態、涙、鼻汁、異常呼吸音、臭気等で異常呼吸音は夜間において聞きとり易のであります。

予防法　外部よりの病原体が入って来ないように注意し、鶏舎の乾燥、換気を十分にし、密飼をさけ、適切な飼養管理により抵抗性のある健康な鶏を管理することが必要であります。

治療法　全体に軽く発生している場合はオーレオマイシン可溶散を使用し、１部の鶏がひどく犯されている場合は病鶏に重点的に抗生物質のマイシリン等を注射し、他の鶏にも抗生物質を使用します。一方、眼鼻等の滲出物は脱脂綿でふきとり、過マンガン酸カリ液等で洗い、口に中に義膜のできているものは取り除き、ヨードチンキ、マーキュロクロームを塗ります。

(B) 鶏痘

これは鶏痘予防接種を行なっている場合は殆ど発生しませんが、今年の様に暑さがはげしい場合は鶏が弱り易く、これに加えて飼養管理が悪い場合は鶏痘が発生し易く、悪性の場合はジフテリー症と合併して大きく悪影響を及ぼします。この病気に対する特効的な薬はないのであって、予防接種、適切な飼養管理による健康維持により予防することが先決であり、発生した場合はとにかく早く発見し軽いうちにクレオリン水等の消毒液で消毒した後に濃いヨードチンキを点状に塗り、症状が進んでいる場合はクレオリン軟膏を塗ります。ジフテリー症が併発する

場合は前に述べたジフテリー症に対する治療を行ないます。

(C) ロイコチトゾーン病

夏に相当発生し、その害の大きかったこの病気も、秋冷と共に発生が下火になって来るのであります。この病気は白血病と異って、合併症が発生しない限り重症のものは別として、大体恢復するものでありますから（再発はないと云われている）状態が悪くて見込のないものは淘汰し、その他の鶏は良好な環境の下に、周到な管理を行ない、緑餌の多給、ビタミン剤の投与、特にニラ、ニンニク等の強壮剤の給与によって早く恢復させることが必要であります。

(D) 寄生虫

蛔虫　これは若鶏に寄生し易く、多く寄生すると衰弱の結果、ジフテリー症、下痢症その他の病気にかかり易くなります。食慾は変わりないのに栄養が悪くなり、羽毛の光沢がなく、元気が衰えて貧血し、下痢便、肉様便をするような鶏は注意を要します。駆虫は寒くならぬ内、即ち 11 月以前にチオジフェニールアミン剤、ピペラジン剤をできれば１羽あて飲ますようにします。

羽虱　これは直接の害がないようで、軽視されているようですが、多く寄生すると、鶏は落ちつかず安眠を妨げられ、産卵は減少し、受精率は低下する傾向になります。特に群飼ケージ管理においては、羽虱が寄生し易く、その結果特に種鶏においては授精率が非常に低下する原因になりますから注意を要します。